

平成 25 年度

「南三陸町の子どもたちとのサマーキャンプ」

平成 25 年 7 月 27 日(土)～8 月 2 日(金) 6 泊 7 日

後援：静岡県教育委員会，神奈川県教育委員会
御殿場市教育委員会



I 事業の背景（必要性）

東日本大震災が発生してから 2 年以上が過ぎた。東日本大震災復興基本法に基づき、様々な支援が行われているが、被災地では、依然として多くの方が避難所生活を余儀なくされ、子供たちの中には震災時の辛い経験による心的なストレスや、遊び場所や遊ぶ機会の減少、遠方からのバス通学、避難所生活等、様々なストレスを抱えながら生活をしている子もいる。

こうしたストレスや心的なダメージを癒していくためには、人や自然とのかかわりの中で楽しい体験をし、新しい思い出を積み重ねていくことが有効な方法の 1 つとされており、中央交流の家では、平成 23 年の震災後、南三陸町と御殿場市周辺の子供たちが集まり、富士山頂への登山をメインプログラムとした本事業を実施してきた。その中で、参加者やその保護者から、キャンプに参加したことによる仲間との絆の深まり、自己の成長（挑戦する姿）が感じられた等の報告があり、成果を上げてきたが、被災した地域の復興や子供たちの心身のケアには長い年月が必要であり、ストレスを抱えながら精一杯生き抜こうとしている子供たちの前向きな姿勢を継続して支援していく必要があると考えた。

また、被災地以外の子供たちが震災を風化させてしまうことなく、防災に関する意識を持つことが重要であると考え、被災した地域とそれ以外の地域の子供たちとの交流事業を実施することとした。

II 事業の概要

1. 趣 旨

- (1) 震災や避難所生活等で様々なストレスを抱えながらも、復興に向け前向きに生活しようとしている南三陸町の子供たちと同世代の被災地以外の子供たちが交流することにより、それぞれが将来に向け、力強く生きようとする気持ちや態度を共有するとともに、生涯にわたる友情を育む。
- (2) 被災地以外の子供たちが、震災や避難所生活を送っている同世代の仲間と共同生活することにより、震災を風化させず防災に関する意識（人とのつながりや助け合いの気持ちを大切に等）の向上を図る。
- (3) 自然の恐ろしさや恵みを理解し、人と自然のかかわりについて考えるとともに、自他の生命を尊重する心情を育む。

2. 参加者

(1) 対象・募集人数

南三陸町の小学校 5・6 年生 15 名
被災地以外の
小学校 5・6 年生 15 名 計 30 名



【南三陸町からの参加者を出迎える様子】

(2) 参加状況

<学年別>

学年	男子	女子	合計
5年生	7	7	14
6年生	15	14	29
合計	22	21	43

<地域別>

地域	男子	女子	合計
南三陸町	10	13	23
御殿場・裾野・小山	5	3	8
沼津・長泉・静岡	2	3	5
神奈川県 (逗子・秦野・青葉区・大井町)	5	2	7
合計	22	21	43

(3) 広報の方法

- ① 募集チラシを作成(交流の家作成)
- ② 御殿場市, 裾野市, 小山町, 沼津市の全小学校5・6年生児童に募集チラシを配布
(各市町教育委員会を訪問し, 各学校のボックスに投函)
- ③ 静岡県中・東部地域の小学校に募集チラシを郵送
- ④ 神奈川県西部・山梨県東部地域の小学校に募集チラシを郵送
- ⑤ 中央交流の家を利用経験のある小学校に募集チラシを郵送
- ⑥ 県内および首都圏での新聞掲載を依頼

3. 日程

日	曜	午前	午後	夜
27	土	(南三陸町出発)	被災地以外集合 15:30, 南三陸町着 17:00, 対面・交流	
28	日	仲間づくりの活動	野外炊事 (グループ活動)	「樹空の森」 見学
29	月	(雨天プロ) 地域施設・交流の家でレクリエーション		こどもの国活動計画 富士登山準備
30	火	富士登山(須走口)		富士登山準備
31	水	山小屋発→頂上→下山(須走口)		山小屋泊(本7合目)
1	木	富士山麓での植樹体験	振り返り・家族への手紙	登山の振り返り
2	金	中央発 9:00, 被災地以外解散 10:00		お別れ会

4. 内容(活動の様子)

(1) 「仲間作り」・「目標作り」 中央交流の家 職員

参加者全体の緊張感をほぐすとともに、ゲームを通して富士登山に向けたグループの仲間作りを行った。また、目標を明確にするため、グループごと全員の指形と目標をかいた旗作りをした。手形は、互いの指がつながるように描くことで、仲間との絆を大切に「心友」をつくるという目的を全体で確認できるようにした。

【主な流れ】

- ① アイスブレイク(全体の心ほぐし)
- ② キャンプネームを決める
- ③ アイスブレイク(登山のグループ内の仲間作り)
- ④ イニシアティブ(登山のグループ内の仲間作り)
- ⑤ 目標設定(目標と旗作り)



【仲間作りの様子】



【「心友」旗作りの様子】

(2)「野外炊事(カレー作り)」 中央交流の家 職員

カレー作りを通して、一緒に登山に行く仲間との交流を深める場とした。ジュニアリーダーが中心となって声を掛け、グループで協力して調理・片付けまで行ったことで、仲間同士の会話が増え、笑顔が多く見られるようになった。



【野外炊事の様子】

(3)「水遊び・交流ゲーム」(雨天プログラム) 中央交流の家 職員

- ① 午前には地域(印野小学校)の室内プールをお借りして水遊びをした。職員がグループで楽しめるプログラムを紹介し、全体で楽しんだ。
- ② 午後の前半は職員、後半はジュニアリーダーが中心となって、交流ゲームを行った。前日に計画した「富士山こどもの国」での活動が中止となり、残念な気持ちもあったが、交流ゲームを通して心身ともにリフレッシュし、翌日の登山に向けた準備ができた。

(4)「富士登山」 登山ガイド: やまぼうし 若林氏・小泉氏

《登山の準備》

毎晩、グループでまとまり、所員の指導のもと、登山に向けた準備(用具だけでなく心の準備も含め)を行った。

- ・ 登山靴の履き方や雨具・スパッツの装着の仕方
- ・ 登山ルートの確認、登山・下山での歩き方、高山病の予防、緊急時の行動等、富士登山の危険さ・困難さについて
- ・ ザックへの荷物の詰め方
- ・ グループごと富士登山に向けての目標を発表、全体目標の確認



【ガイドの話を聞いて、いざ出発!】

《登山1日目》

- ① 須走口5合目(2000m)にて高地順応のため、トイレを含めて休憩を取り、靴紐等、装備の確認をした。その後、登山ガイドの方から、登るときの歩き方や姿勢、注意事項について話を聞き、11時に出発した。
- ② 6グループを3グループずつ2集団に分け、それぞれ、休憩するたびに登る順番を入れ替えることで、後ろを歩くグループに負荷が掛かり過ぎないようにした。また、疲労や高山病等でペースが遅くなりがちなのは、ガイドの近くでペースを確認しながら、自力で登山できるようにした。
- ③ グループ内だけでなく、前に行く集団から後方へも「がんばれ!」と励ましの声が掛けられた。ゆっくり時間を掛け、6時間半で全員が本七合目に到着することができた。
- ④ 山小屋の狭い寝床で、寝る場所をめぐるやりとりの中で、涙を流す子がでた。男女それぞれ別々に集め、富士山の頂上を目指す意味、そして、今回のキャンプの目的について、スタッフやボランティアから話をするとともに、心の友と呼べる仲間をつくるために、明日、全員で山頂を目指すことを再確認した。
- ⑤ 明日の登山に向け、職員とボランティアで参加者の健康状態等を確認するとともに、全員登頂を目指してできる支援の方法について、スタッフ全員で共通理解を図った。



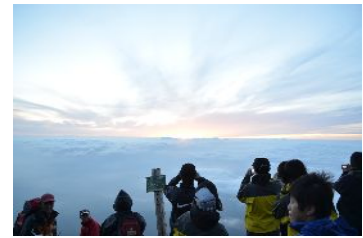
【暑さに負けず、登山する様子】



【本七合目山小屋「見晴館」にて】

《登山2日目》

- ① 早朝4時、ガイドを先頭に登山を開始し、ご来光の時刻に合わせ、8合目付近で休憩をとることにした。
- ② 眼下に広がる雲海の端から、太陽の光が少しずつ差してくると、朝日に照らされ、紅く染まった富士山頂の姿が目に入り、子供たちが歓声を上げた。初めての体験をした子供たちは、再び「頑張るぞ！」と声を掛け合って、山頂を目指した。
- ③ 午前8時20分、小学生43名およびジュニアリーダー、スタッフ等総勢64名全員が、富士山頂への登頂に成功した。メンバー全員で登りきった達成感、互いに励まし合った仲間、支援してくれた人への感謝の気持ち、様々な思いがこみ上げ、感動して自然と参加者の目に涙があふれた。
- ④ 高山病と疲れから、ペースが上がらない子もいたが、ボランティアと職員がそれぞれ寄り添い励まし合いながら、自力での下山を目指した。
- ⑤ 下山開始から5時間半。ゆっくりとしたペースであったが、全員が無事に自力で須走口五合目に到着した。登山ガイド、ボランティア、ジュニアリーダー等、すべてのスタッフにお礼の気持ちを伝えるとともに、一緒に山頂に登った仲間と喜びを分かち合った。



【ご来光を見て、決意を新たに！】



【富士山頂で仲間を出迎える様子】



【目標達成の喜びを分かち合う様子】

《片付けと振り返り》

- ① 感謝の気持ちを込め、登山に使用した用具の汚れを一つ一つ丁寧にふき取り、片づけをした。借りた用具を返すとき、両手を添えて「ありがとうございました。」としっかりお礼を言う姿が見られた。
- ② 登山の振り返りでは、「自分・友達の頑張り、感謝したいこと」「自分が得たもの」「富士山の自然等についての発見」について記述し、グループごと発表した。「つらかったけど、『がんばれ！』『ここ、すべるから注意して！』などとみんなが声をかけてくれたので、最後まであきらめずにできた。」「人って、こんなに励まし合えるんだなと思った。」「はじめは自分から声をかけられなかったけど、この体験(友達に励まされたこと)をして、自分から声をかけられるようになった。心友ができて、うれしかった。」等、登山を通して、仲間への感謝や自分自身の成長を実感する感想が多く聞かれた。また、「夏なのに雪があった。雲の上からの景色は最高だった。」「雲が下をおおっていたけど、そのまた上に雲があって、自分が小さい存在だと感じた。」等、雄大な富士山の自然を肌で感じたからこそ気づくことができた感想もあり、子供たちが貴重な体験をすることができたことを実感した。

(5) 「富士山麓での植樹」

講師：富士山ナショナルトラスト【御殿場口5合目】

富士山の環境を守る活動を体験することで、人と自然とのかわりについて関心を持ち、自然を大切にする気持ちを育む場とした。「自然に比べて人間の力はとても小さなものだけれど、こうして少しずつ元の自然の姿に戻す活動をするので、富士山の自然を守ることができるんだよ。」という説明を、子供たちは真剣な表情で聞いていた。



【植樹の様子(御殿場口5合目にて)】

(6) 「キャンプのまとめ」 中央交流の家 職員

- ① キャンプを通して、自分またはグループで立てた目標について振り返りをした。
 - ② キャンプに参加させてくれた家族に対して、感謝の気持ちを手紙に書く活動を行った。書いた手紙については、言葉を添えて、直接、家族へ手渡しするようにした。
 - ③ 6泊を共にした仲間たちへのメッセージや感謝の気持ちを伝えるカードを作った。
- ～振り返りの作文より（一部抜粋）～



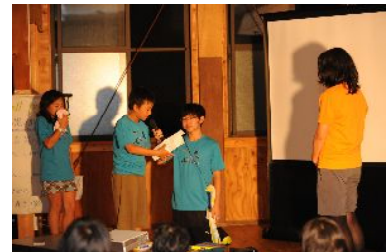
【仲間へのメッセージを書く様子】

この登山を通して、いろいろな人の素顔、思い、かけ声の意味（省略）などが分かったので、今、もっと知りたいという気持ちとキャンプがもう終わってしまうという気持ちが入り混じっています。みんなとはなれたくないし、別れがいやになっているというのが、本当の気持ちです。始まる前には、こんなことになるとは思っていませんでしたが、今は思っています。

わたしにとって、「しんゆう」は『深』くまで知っていて、『信』じ合える仲間、友達、そして、いっしょにいれば、どんなことでも勇気を出せる『友』だと思っています。

(7) 「お別れ会」 中央交流の家 職員

キャンプでの思い出を振り返るとともに、絆の深まった仲間への思い（感謝の気持ち）を伝える場として、お別れ会を行った。思い出に残るシーンをまとめたスライドショーがスクリーンに映し出されると、楽しい思い出がよみがえり笑顔があふれた。また、お世話になったボランティアに感謝の気持ちを伝える場面では、自然と涙があふれ、仲間としての絆の深まりを感じることができた。



【感謝の気持ちを伝える様子】

5. 評価

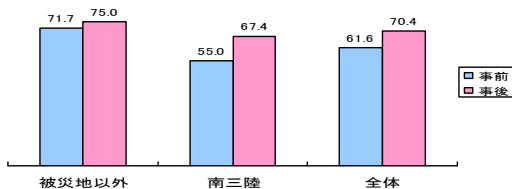
(1) 評価の方法（アンケート調査の実施）

参加児童に対して、このキャンプでどのような力を身につけたのかを検証するために「IKR 評定用紙（簡易版）」を使って質問紙調査を実施した。

(2) 結果

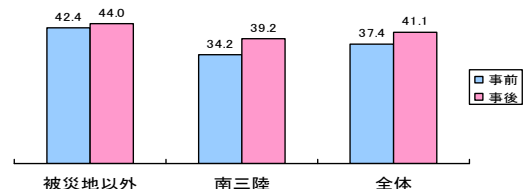
次の通り、参加児童の「生きる力」が高まったことが分かった。

「心理的社会的能力」の変容（得点範囲 14～84 点）



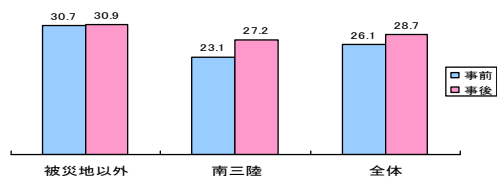
「だれにでも話しかけることができる」といった『明朗性』や「多くの人に好かれている、だれとでも仲良くできる」といった『交友・協調』などが身についた。

「徳育的能力」の変容（得点範囲 8～48 点）



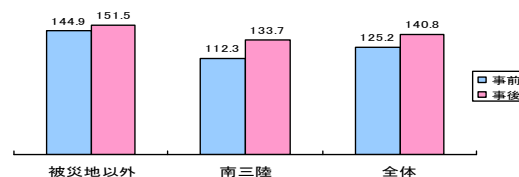
「人のために何かをしてあげるのが好きだ、人の心の痛みがわかる」といった『思いやり』が身についた。

「身体的能力」の変容 (得点範囲 6~36 点)



「早寝早起きである」といった『日常的行動力』が身についた。

「生きる力」の変容 (得点範囲点 28~168)



「心友」をつくるという目的でグループ活動をし、その仲間と共に富士山頂まで登山したことにより、まわりの人とのかかわりを楽しみ、思いやりをもって接しようとする力(生きる力)が高まったといえる。

Ⅲ 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

(1) 事業の企画については、南三陸町教育委員会の職員の方と連絡を取り合い、現在の被災地児童の実態把握を行った上で作成した。その上で、事業の趣旨を「(昨年度)被災地の小学生の心を癒し元気づける」から「(被災地以外の子供たちも含め)それぞれが将来に向け、力強く生きようとする気持ちや態度を共有する」という表現に変更した。被災した子供たちが、震災を自ら乗り越えようとする思いを大切にしながら企画した。

(2) キャンプ全体の目的を『心友』をつくることとし、そのメインとなる活動プログラムを、富士登山(参加者全員で富士山の山頂に立つこと)とした。6泊7日のプログラム編成や内容については、その目的に向かって、仲間作りや登山の準備を行っていくようにした。

※ 「心友」とは、ただ「親しい友達」ではなく、離れ離れになっても互いに信頼し、心が通じ合えるような友。



【全員の手形と目標をかいた旗】

(3) 参加した子供たちが、生涯にわたる友情を育むための手立ての1つとして、「心友」のロゴと富士山のデザインが入ったお揃いのTシャツを作成し、富士登山の際に、全員が着て山頂を目指すことにした。このTシャツの作成には、事業の趣旨に賛同してくださった地元御殿場市商工会から寄付をいただいた。



【「心友」Tシャツを着て記念撮影】

(4) 被災地以外の子供たちとの交流事業にすることで、被災地以外の子供たちも震災の記憶を風化させることなく、防災に関する意識が持てるようにするとともに、同世代の仲間が頑張っている姿を見て、互いに将来に向け、力強く生きていこうとする気持ちを育むことができるような「学び」の機会とした。

(5) 富士登山を通して自然の厳しさや雄大さを体感した後、富士山での植樹体験を企画した。一人の力は小さくても、自然を守るために人間ができることを体験を通して学ぶことで、人と自然とのかかわりに関心をもち、共生していくことの大切さに気づくことができるようにした。

- (6) サマーキャンプを通してできた絆や挑戦する気持ちを活かし、いずれはそれぞれの地域で活躍するリーダーとして、震災復興に向けた力となる人材を育成することを願い、中学・高校生のジュニアリーダーの参加を加えた。

2. 運営のポイント

(1) ボランティアスタッフとの信頼関係作り

それぞれ異なった地域から集まり、初めて顔を合わせる子供たちが、「心友」と呼べる関係を築いていく過程には、ボランティアを含めたすべてのスタッフのかかわりが、重要になってくる。そこで、スタッフ間で事前打合せを行い、キャンプのねらいや参加者へのかかわり方等について共通理解を図った。

(2) 安心してキャンプに参加できるようにするための支援

- ① 参加者が安心してキャンプに参加し、困難に挑戦できるようにするために、毎日の振り返りシートに、各グループ担当のボランティアから、一言コメントを書いて各自に返すようにした。
- ② 1日の終わりにスタッフミーティングを行い、参加者の様子（健康状態、食事の様子、気になる表れ等）について全体で情報交換をするとともに、翌日の活動の安全対策等について確認を行うようにした。

(3) より効果的な出会いの場をつくるための工夫

事前にキャンプへの意気込みや簡単な自己紹介等のアンケートをとり、それぞれ出会う前に同じグループの仲間のアンケートを読むことで、よりよい出会いの場が設定できるようにした。

(4) ジュニアリーダーとボランティアスタッフの役割について

グループごとに中学・高校生のジュニアリーダーとボランティアスタッフをつけ、子供たちが安心して活動できるよう支援したり、ロールモデルとして手本となるよう行動したりするようにした。主にグループ活動ではジュニアリーダーが中心となり、安全面や生活面での支援をボランティアが担った。また、必要に応じて、ボランティアスタッフがジュニアリーダーを補佐し、ねらい達成に向け、適切な支援ができるようにした。

3. 成果と課題

(1) 成果

- ① 「参加者 64 名全員で富士山頂に立つ」という思いで登山に臨み、その目標を達成することができた。また、目標達成のために互いに励まし合ったり、自分の限界に挑戦したりする姿が見られ、子供たちは達成感や仲間の存在の大切さを感じることができた。
- ② 活動を重ねるたびに、まわりの仲間やスタッフへの感謝の気持ちが生まれ、最後の晩のお別れ会や別れの場面では、仲間への思いがあふれ出した。キャンプを通して、かけがえのない仲間をつくることができた。また、まわりの人への感謝の気持ちや思いやりの気持ちを育むことができた。
- ③ グループ活動の中心となって活動したジュニアリーダーにとっては、貴重な実践の場となった。小学生へのかかわりや（ロールモデルとして）自らの行動の在り方等において、キャンプ中に大きな成長が見られた。
- ④ ねらい（「心友」をつくる）達成に向け共通理解を図りながら、参加者への支援を行

っていく中で、交流の家職員，南三陸町職員，ボランティア等すべてのスタッフの信頼関係が高まり，よりよい支援ができた。また，今後の事業運営に向けての協力体制を，さらに高めることができた。

(2) 課題

- ① 今年度，仲間の絆を深めるために行った手立てについては，一定の成果を得ることができたが，参加者の絆を深めるためのグループ活動の在り方や，参加者へのジュニアリーダーとボランティアスタッフのかかわり方等について，よりよいものを目指し検討していくことが望まれる。
- ② 世界文化遺産登録により，今後，夏の富士登山については，さらに混雑が予想される。安全面を考え，登山体制等について検討していくことが望まれる。

担当：柴田勝好，吉野達也，中村匡寛